

た中老。寛延元年六月廿一日故吉徳の側室貞如院が歸國の途に上つた後、同廿六日廣式の中老が盃交替によつて靈子の受繼をした際、例によつて靈子の湯を試味したが、悪臭甚だしく、口中熱して糜爛する如くであつた。老女森出之を聞き、亦口中に含んで吐き、當直の醫中村正伯を招いて検査せしめた所、正伯は爲に廣式の騒擾を致さんことを恐れ、直に湯を棄て靈子を破毀し、森出・菊二人に治療を加へ、側用人富田次太夫から重熙に上申した。重熙亦禍の淨珠院に及ばんことを思ひ、正伯を召して善後の處置を講じた。淨珠院は先侯宗辰の生母で、固より廣式に居たからである。越えて七月四日廣式に能樂を催し、重熙臨みて之を觀たが、お次女中の靈子を擧る者が暫くその席に居なかつた間に、靈子の中に異状を呈したので、正伯は之を検して又前回と同じといつた。後靈子附近に楊梅所屬の中老淺尾を見たといふ者があつたから、老女森出は鞫問したが實を得ず、之を富田次太夫等に交付した。次太夫は淺尾を諭して曰く、この事恐らくは眞如院の指押によつて汝の爲した所で、若し白状せば罰せられる者眞如院一人に止るであらうが、然らざれば遂に公事場奉行をして訊問せしめるに至るべく、延きて累を眞如院所生の公子女に及ぼすであらうと。淺尾乃ち眞如院の委託によつて之を取へてしたことを告げ、廣式の長屋に幽閉せられた。是は七月十一日のことである。次いで淺尾を縮駕籠に乗せて金澤に送り、十月十八日大槻朝元の舊邸に隣る藩の長屋に禁錮した。淺尾の自白した事情は前述の如くであるが、侯と淨珠院とを害する爲であれば、置毒

の方法甚だ拙劣であり、正伯の處置も怪しむべきものがある。或は眞如院が江戸を去つた機に乗じて、眞如院の所生利和を相續順位から排除し、その弟重靖を推さんとするもの、淺尾を強要して罪に陥れたのかも思はれる。後寛延二年十月廿一日藩は毛利總次郎をかの幽囚所に遣はして、密かに淺尾を殺害せしめ、武田左衛門・牧彦左衛門之を檢屍した。神史に淺尾を蛇貫の刑に處したといふは全く虚偽である。↓ヘビゼメ 蛇貫。

アシガタニ あしが谷 能美郡左隣部落の南方で大日川に合する一支流を出す溪谷である。

アシガル 足輕 (一)名稱 幕府の同心に當る。併し加賀藩では足輕以外別に同心といふものもあつた。足輕は前出利家の頃では、御弓之者・御鐵炮之者と呼んだが、これは當時足輕の名稱が無かつた爲ではなく、別名と見ていゝのであらう。

(二)職務 足輕の服装は一刀を帶して、通常袴を着用することが無く、その武技は弓銃を専らとする。蓋し戰國以降の戰術に於いて弓銃の必要最も著大であつたから、平士中に射手組・異風組を置き、又輕卒に弓之者・鐵炮之者を置いて之に屬せしめたが、尙その數寡少であつたので、前出綱紀の世に大組・中組・先手組を定めて規模を増大した。大組は鐵炮を掌るもので、延寶二年四月三隊を置き、大組頭三人之を率ゐる。中組は一に持方足輕ともいはれ、延寶八年十月三隊を置き、天和中増して七隊とし、その中弓三隊・鐵炮四隊とし、持方頭三人・持筒頭四人之を率ゐる。又先手組は前に弓之者・鐵炮之者と呼ばれたもので

あるが、貞享三年十一月弓七隊・鐵炮十四隊とし、その隊長たる先弓頭は弓一隊を、先筒頭は鐵炮二隊宛を指揮した。これ先手組は人持組に屬するもので、人持組の數は七組であるから、それに分屬せしめるに便なる數を撰んだのである。大組・中組足輕の俸祿は平二十五俵・小頭三十五俵で、先手組は平二十俵・小頭三十俵であつた。その他割場附足輕五十組・御留居附三組・定番附四組・聞番附四組・公事場・普請會所・作事所・算用場・細工所以下諸奉行所その他遠所附の者があつて警備若しくは雜務を掌り、又別宮・木滑・河原山等國境の警備に任ずる者もあり、その種類と員數と甚だ多かつた。

アシガルツウコウロク 足輕通考錄 寫本一冊。本章十六條附章四十六條とした本と、本章十七條附章四十六條とした本とあり、文章も彼は相違してゐるが、畢竟同一の書を改編したものである。加賀藩に於ける足輕の種類沿革・勤務等一切を記したもので、文化二年十月の日附があるが、著者は詳かでない。

アシガルユイシヨキ 足輕由緒記 ↓カヨウアシガルユイシヨキ 加陽足輕由緒記。**アシダ** 足駄 加賀藩で町人が高足駄を穿つことを禁止した令は、萬治三年七月十日の町方御定の内に、『惣而町人上下共、高あしだはき候儀御停止。但道患敷時分、歴々町人杯用捨候事。』とあり、又寛文十二年正月二十日の御定書には、『道掃除之刻、あしだをはき罷出候者有之由に候。跡々より歴々之町人は各別、輕町人共は主人さへ高あしだはき候儀御停止に候處、下人共木履・あしだはき掃除など仕候儀、沙汰之限候。』ともある。

アシナカ 足半 草履の踵の部分を除いたもので、加賀藩の制では、近侍の士が徒歩して番侯に供奉する時に之を穿つた。士家の若黨も亦之を用ひた。

アシナカマチ 芦中町 金澤泉新町のうしろ町で足半町と書いたこともある。

アシノウコウイカイ 亞相公遺誠 前出利家が薨去の前十二日、慶長四年三月廿一日にその夫人をして箒を探らしめ、自ら口授した遺言状をいふ。

アシノウコウオヤワ 亞相公御夜話 三冊。村井長明著。前出利家の直言を、侯に侍した長明が筆録したものである。一に陳善録といふは前出綱紀が與へた外題である。その他利家夜話・高德公夜話・村井又兵衛聞書・加州獻納記などいふこともあり、それらの書は各内容に多少の差違がある。

アシノウコウオヤワトウシヨ 亞相公御夜話頭書 三冊。有澤永貞著。亞相公御夜話の毎條に、朱にて頭註を加へ、某合戦は某年某月日など記したものである。世に之を有澤本の御夜話と稱する。又亞相公御夜話頭書補註三冊は富田景周の著で、有澤永貞の頭註を更に補うたものである。

アスカキセイ 飛鳥井清 もと大聖寺の藩士であつた。清は九谷陶器が江沼郡特有の物産にして、其の名遠近に聞えるに拘らず漸次衰頹するを嘆じ、明治十二年石川縣令千坂高雅に説いて、官金を借受け、塚谷・淺・大藏・清七の各自に従事した二窯を譲り受けて陶器會社を創立し、淺・清七及び竹内吟秋を陶工部長とし、淺井一毫を掛工部長として大に其の事業を擴張した。かくて清の統率指導其の宜し